

マクロの視点と計画

西田 幸男*



マクロ (macro-) とは、「大きい」とか「長い」とかを意味する連結語ということになっている。日本語では、「マクロ経済」とか「マクロ的視点」などのように使う。さて、問題はマクロという言葉で表される事柄の「大きさ」なり「長さ」なりはどのくらいのものか、ということである。何くだらないことを、とお考えの向きがあるかもしれないが、これが結構ばかにならない。計画を立てるという立場からすると、マクロだミクロだといった概念を弄んでいるのが我々人間であるとすれば、これは明らかに人間の肉体的、精神的能力の範囲内の量でしかないと考えざるを得ない。時間の長さで言ってみれば人間の寿命、せいぜい百年程度、空間的大きさなら目で見たり触ったりできる範囲くらいのものであろう、ということである。「国家百年の計」とか「見渡す限り」などという表現はこころあたりの限界をわきまえた結果であろうと思われる。

しかし、厳密に考えると、これでも相当に甘い。というのは、百年というのは人間の「生きている間」をすべて勘定に入れてのことで、何か計画を立てるということになると、その立場ある責任者の計画立案時の年齢（若くても40歳くらい）とその計画立案者が実際の計画の結果責任をとれる年齢（60歳～70歳くらい）からいってせいぜい20年～30年くらいが関の山であろう。要するに長期計画を立てる人にとってみれば、自分が死んだ先（または毫碌する先）のことまでまともに考えられるわけがない、というのが論拠で、マクロと言ったときの時間的上限はどうも20年～30年かなあ、と思うわけである。となると、「国家百年の計」を一人で立てるのは無理であるということになる。空間的広がりについては、宇宙のことまでよく分かるようになってきてはいるが、実際に何かやろうということになると能力的にはやはり地球レベルが関の山である。つまり、計画という場で考えると、マクロの範疇は地球上のことを20年～30年スパンで取り扱う程度のことで、それ以上のス

ケールになると実現性がいかがわしい大風呂敷になると言わざるを得ない。あたりまえと言えばあたりまえのことであるが、別の見方からすると、これくらいのスケールまでなら真面目に取り組みば結構実用に耐えるコンセプトを構築できるはずであり、これが行動の指針に成りうるとも言えるのである。

なぜいまさらこのような能書きを持ち出したのかということであるが、昨今の世の中の風潮を見るにつけても極論すればまったく目先のこと、自分の身近なことばかりに気を取られた行動パターンが目立つ一方、夢のようなスケールの無責任提案が多いような気がするからである。考えてみれば、高度成長期には、右上がりの経済を前提にした超長期の未来予測が跋扈し、最近の10年には今日明日の見通しに偏った処世術が大勢を占めているのである。要するに、このところ時代の趨勢にごまかされて、国を挙げて、「ちゃんとした」計画（すなわち、冷静な分析に基づいて適正なスパンと規模を保った責任のある計画）を立てることを怠っているように思える。

日本全体が長期にわたる経済不況から抜け出せない状況下で、明日の生活や職場の確保を心配しつつマクロ的視点からしっかりした対策を立てると言われてもその気になれないのは分かるが、政も官も民もいかにも自信なげに目先の行動パターンを繰り返しているように見える。要するに「うろたえて」いるのである。この点、PC技術協会においては海外プロジェクトに積極的に対応するべく研究会の設置を検討されるなど将来に対する布石を着実に打たれているのはたいへんに心強いところである。寿命の長い品物を扱っている我々の分野においては、とくに、ここで言うマクロの視点が不可欠であり、官学産の各持ち場で具体的な行動の指針となるしっかりとした「計画」を立てるということの意義を日常の業務の中で常に頭に置いておくことがこの業界の発展にとって昨今とくに重要であると思う次第である。

* Yukio NISHIDA：本協会理事・(財)国際臨海開発研究センター 理事長